

「発想力」「論理力」「表現力」を育てる

～言葉と言葉・文と文のつながりを意識した対話を通して～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかかわって

学校提案「学びをデザインする子どもたち～3つの対話の充実によって～」を受けて国語科部では、本年度の研究テーマを「『発想力』『論理力』『表現力』を育てる～言葉と言葉・文と文のつながりを意識した対話を通して～」とした。国語科部では、子どもたちが、協同的な学びの中で言葉を重ね、紡ぎながらより質の高い学びに達していくことが、学びをデザインしている姿だと考える。言葉と言葉・文と文のつながりを意識させることは、子どもたちが、言葉を重ね、紡ぐこととなり、学びをデザインすることになるだろう。

国語科学習を通して「発想力」「論理力」「表現力」を育てることによって、子どもたちをより質の高い学びに導いていきたい。特に本年度は、対象・他者・自己との間で、言葉と言葉・文と文のつながりを意識した対話が、豊かに行われる国語科学習のあり方を研究していきたい。

(2) 国語科でめざす子ども像

国語科部では、「発想力」「論理力」「表現力」の3つを次のように定義している。

「発想力」については、初めて出合う文章に対して考えをもてる力と考える。また、友だちとの話し合いにおいて、他者の考えに触れることにより、今まで考えつかなかった新しい考えをもてるようになることだと考える。また、文章を書く場合に他の文章や友だちの作品からヒントを得て、自分の文章を違った視点から作り上げる力だと考える。

「論理力」については、教材を読んでいく際に、教材文の叙述を根拠として論理的な解釈をし、文章を書く際には、より伝わりやすい構成を考えたりすることができる力と考える。

「表現力」については、豊かな語彙を持ち、状況や場面に合った適切な表現を考えながら話したり、書いたりすることができる力と考える。

これらの力は、授業で取り上げる教材文だけではなく、読書指導を通して、豊かな読書経験を積むことによってもつけていきたいと考えている。

以上3つの力のある子どもを、国語科のめざす子ども像とする。

2. 国語科学習における「学びをデザインする子ども」

国語科部では、学びをデザインする子どもの姿を次の表のように考えている。

	低学年	中学年	高学年
課題解決	教師と共に単元全体の見通しをもって学びを進めていく。	自分たちの目指す姿を教師と共に探り、単元全体を見通して学びを進めていく。	今までの学習経験を活かしながら、単元全体を見通して学びを進めていく。
対話	自分の考えを順序立てて伝え、友だちの考えを分かろうと、たずねる。	友だちの考えを自分の考えと比べながら聞き、そこから気付いたことを伝え合ったり、自分の考えを深めたりする。	目的や意図に応じ、考えたことを的確に伝える。
学び方	経験を活かして学習を深めようとする。	これまでの学び方を目的に応じて活かし、学習を深めることができる。	これまでの学び方を目的に応じて選択し、活用し、学習を深めることができる。

以下に、子どもたちが学びをデザインしていくことができるような支援のあり方を例示する。

・教材との出会いの場面

3年生の教材「海をかつとばせ」であれば、単元に入る前に「山下明生さんは他にもいろいろなお話を書いています。山下明生さんの作品にはいつも何かが出てくるようです。それは、何か見つけれられるかな。」と、子どもたちに声をかけておく。そうすると、「先生！『まつげの海のひこうせん』と『ふとんかいすいよく』を読んだけど、どちらも海が出てきたよ。」「ぼくも、『うみをあげるよ』っていう絵本を見つけたよ。本当の海は出てこなかったけど、題名には、うみがついているよ。」と、子どもたちは、山下明生さんの作品を比べながら読むようになる。教師は、「よく見つけたね。本当にいつも、海が出てくるのかな。他の作品はどうかな。」と、子どもと作品、そして、作者との距離が近くなるように、読み聞かせをしたり、教室の図書コーナーに山下明生さんの絵本を置いたりしておく。

そうして、いよいよ、「海をかつとばせ」の単元に入る時には、「山下明生さんが、書いたお話ですね。どんなお話でしょうね。」と、子どもたちが、想像を膨らませながら読んでいけるようにする。

・子どもたちの「やってみよう」を言語活動に

2年生の教材「お手紙」であれば、子どもたちに、登場人物の行動や会話を中心に想像を広げながら読むことができる力をつけたいと考える。

そこで、音読劇をするという言語活動を取り入れるのだが、ただ「音読劇をしよう」というのでは、子どもたちの学習意欲は高まりにくい。子どもたちが、今からする学習に対して「おもしろそう。」「やってみよう。」「よし、やるぞ。」という思いをもって臨めるようにしていく必要がある。

そこで、「普通の本読みと違って、音読劇となると、台詞を読むときに、がまくんやかえるくんが、どう思っているのかが分からないと読めないよ。難しそうだけど、そんなことできるかな。」「できる！」「本当?!じゃあ、一度1の場面を先生が読むから、その後に、だれかに役割音読してもらおうよ。」と言って、子どもたちのやる気を喚起させて、学習活動に入る。

・本時における学びのデザイン

子どもの思いや、疑問が起点となり、子どもたちが、問いかけ、応え合い、言葉が重なり紡ぎ合う中で、質の高い学びを実現させる授業を目指してきた。

下に2年生の「スイミー」の実践を用いて、本時における学びのデザインを示す。(名前は仮名)

～スイミーがだんだん元気を取り戻す場面～ 本時 5/10

子どもたちは、スイミーにインタビューし、それに対して自分でスイミーになったつもりで答える活動をしている。その中で、隼人さんの「スイミーさん、元気をとりもどしたってあるけど、あのことを忘れようとしたんですか。」という問いかけをみんなで考えることにした。隼人さんが、考えた答えは「勝手に元気をとりもどしたんです。」ということも、紹介し授業を進めた。以下は、ペアで課題について話した後の交流場面である。

太一「ぼくたちは、勝手に元気を取り戻したんじゃないくて、虹色のゼリーのようなくらげとかを見るたびに、おもしろいものを見るたびに、元気をとりもどしたと思います。」

彩「『おもしろい物を見るたびに』だから、見るたびに、(黒板に階段を描きながら)だんだん見ると階段みたいに、こうやって、おもしろい気持ちがだんだん上がって行って、それで忘れてないんだけど、忘れてはいないんだけど、だって『楽しく暮らしていた』って書いてあるから。」

公子「忘れていないと思うけど。えっと、『だんだん』って書いてあるから、おもしろい物を見たら、また元気を取り戻して、また、おもしろい物を見たら、元気を取り戻して、何回も繰り返して、あの、元気を取り戻したんだと思う。」(太郎・道男も黒板の前で同じ考えだと頷く)

彩さんは、近くの席の4人の友だちと話し合いながら強めていった自分なりの答えを、みんなに伝わるように、黒板に5段の階段を描きながら話した。授業後の振り返りで、彩さんの考えを、多くの子が、よく分かったと書き、図を描きながら話すのはいいやり方だと発見していた子もいた。

また、彩さんと一緒に話していた、公子さんは、本文の「だんだん」に着目して、それにより課題に対する答えを導き出そうとした。

彩さんたちのグループの姿に、対象との対話を深め、自己の考えを更新した、学びをデザインする姿が表れているといえるだろう。同時に、発想力・表現力を高めていた姿だともいえるだろう。



瞳「さっきの 太一さんと、芽衣さんと、幸太さんと、祥子さんと似ててなんだけど、元気を取り戻したってことは、スイミーを虹色のゼリーのようなくらげとかが、いやな気持ちなんだけど、忘れようとして…。」

T「忘れようとした？」

瞳「イセエビとか友だちの所へ行って、やっと忘れて、そうして、忘れて。」

由美子「瞳さんに質問で、忘れたって、どこに書いてるんですか。」

由美子さんが、どこに「忘れた」と書いているのかと、瞳さんに問うことで、瞳さんも、言葉と文にもどりながら、考えを深められている。

瞳「書いてないけど、忘れようとしたのは、ゼリー（教科書を見て考えながら）あの…悲しくて、悲しくて、だから、忘れようとして、あと、2の場面にもちょっと入ってるんだけど、怖かった、寂しかった、とても悲しかったの、真ん中にある寂しかったというところに、寂しすぎたから、イセエビとか、うなぎとかに会って忘れた。」

瞳さんは、物語をいきつ、もどりつしながら読むことで、課題を解決しようとしている。これらのような、由美子さん、瞳さんの対話が本時における学びをデザインする姿であるといえるだろう。

聡子「私たちは、考えが似てるけど、ちょっと違って、私は、おもしろいものがいっぱいあったから、全部おもしろいし、半分忘れたみたいになって、彩ちゃんが、さっきやった、こんな階段の半分まできて、それで、ちょっと忘れないけど、ちょっと覚えてるけど、でも半分忘れて、楽しい気分になったんだと思います。」

3. 研究の展望

上記のような「学びをデザインする子ども」を育てるために、研究に対する取り組みを「対象」「他者」「自己」の3つの対話ごとに述べていく。

①対象との対話

国語科の学習では、教材文の叙述を手がかりにして、自分なりの解釈や考えを作っていく。その際には、言葉と言葉を関連づけたり、文と文を関連づけたりしながら対象との対話を行って

くことになる。そこで、(i) どの言葉や描写に着目するか。(ii) どの言葉や描写とつながっているかを考える。(iii) どのような解釈ができるのか。これらを子どもたちが意識できるようにしていく。そのために、学年に応じた単元構成や授業展開を研究の対象としていく。

②他者との対話

「文章と友だちの意見とをつなげて自分の意見を更新する」「友だちと別の友だちの意見を聞き比べることにより自分の意見を更新する」といったことができるようにするために、どのような授業展開が有効であるかを研究対象としていく。よって、他者との対話を成り立たせるために、聞き手と話し手の間に情報をやりとりする必然性や目的が必要となる。それらが生み出される課題設定の仕方についても研究の対象としていく。

③自己との対話

自己との対話は、自己の世界と対象・他者との世界を繋げる活動である。この活動をヴィゴツキーは、内言という言葉で説明している。内言とは、言葉の辞書的な語義ではなく、一人ひとりの生活と結びついた言葉の意味をつかさどるものであり、自分に語りかける言葉である。

よって、言葉や文を吟味することを通して、自己内対話がうまれる授業展開を研究していく。

4. 研究の評価

学校提案の「学びをデザインする子どもたちー3つの対話の充実によってー」がどの程度達成できたかは、子どもたちの学びの軌跡を評価しなくてはならない。そのために、授業記録をとり、子どもたちの学びの実際をできる限りくわしく記述することにより評価したいと考える。

そこで、評価と支援が一体となるように、単元目標に「発想力」「論理力」「表現力」を記していく。

また、「発想力」「論理力」「表現力」の高まりについては、子どもの発達や対象の持つ意味をふまえつつ以下の観点を中心に評価していく。

- ・「発想力」…他者との対話での双方向のやりとりの中で、新たな考えがどれだけ引き出せたか。対象との対話において課題に対して理由や根拠を明確にして、にどれだけ新たな視点を加えられたかなど。
- ・「論理力」…対象との対話において、理由や根拠を明確にして論を展開できているか。他者との対話において、教材と友だちの発言をつなげたり、友だちと友だちの発言をつなげて論を展開できているかなど。
- ・「表現力」…他者との対話において、友だちの発言に沿いつつ自分の考えを加えてどのように表現できているか。また、音読など表現活動の実際、書かれた文章における言葉の使い回し、語彙の豊かさなど。

さらに、単元や授業という短期的な成果と課題に加えて長期的な研究の成果と課題についても把握を行う。方法としては、一学期と三学期に行う同じ系統の単元同士の比較によって行うこととする。

- 参考文献 「豊かな言語活動が拓く 国語単元学習の創造 III小学校低学年編」
日本国語教育学会 東洋館出版社
「小学校国語科学習指導の研究 26 話し合い・聞き合い・学び合い」
石田佐久馬 編 東洋館出版社
「豊かなことば育ちが心と学力の基礎」 村山 士郎 著 本の泉社
「教育科学 国語教育 No.737 『対話力』で国語教育の活性化」 明治図書
「教育の方法」 佐藤学 著 左右社